（日刊）（明治三十九年四月十九日第三種郵便物認可）　明治四十一年十月七日　京城新聞　（水曜日）　第八十號　（一）

京城新聞

寄書　不言生に問ふ　卿然

不言生足下、予は足下が常に吾人人類の心靈に安心を與ふることに就いて熱慮せらるゝは吾人の多とする所にして足下の奮闘、足下の所說に對して常に多大の敬意を拂ふものゝ一人なり、雖然、君父の言も又聽くべからざるものあり、希くは足下、予の足下の所論に對して疑義を挾むを容せ

足下「世界の君主皆姓氏を有す然るが故に絕對的ならず、我（日本）陛下姓氏を有し玉はず故に絕對的に在します」との足下の所論は聊か牽强附會の譏を免るべくもあらず足下、原始時代の吾人の祖先何人か姓氏を有したるものありや、予は幸にして日本國の臣民たり故に之れ以上を說明するの自由を有せずと雖ども惟ふに賢明なる足下に在りては予の言ふ所の趣旨を諒するに苦しまられざるまじと信ず

實に神道は世界の宗教を統一するの大宗教たるべしとの一節に至りては不學予の如きを以てすれば論旨散漫、理義茫漠、論難するだにも困却するを覺ふ希くは之れに就きて予の個條を上げて尊するに對して詳說するを煩とせられざらんことを、即ち

一、廣義に解……道の價値（牽强附會にあらず）
二、神道の安心立命
三、死後靈魂の歸着安定を說かざるものゝ宗教としての價値

讀者文壇

●寄宿舍の記（二）　かへで生

眼覺む、傍に寢ねたるものアイ君なり
君、何時歸つた、
遲かつたよ、君はよく寢て居つたぜ、
僕、些とも知らんよ、
アレじや盜賊に來られても解らんな、
アッハヽヽ、
今朝は、久しぶりにて笑ひつゝ起きぬ。
長屋のお三ざん、眠むそうな顏して火を燃く、竈より黑き烟ボツ〳〵と出づ。
食堂に入る、人は既に在らず、茶溢れ箸四散し卓上の汚さ、みのなき汁は底を越ゆ僅に寸餘、拯へばガチャリと音す。
ア、不味い〳〵」隣の食堂に嘆聲洩る、
テー君の如に聞ゆ。
夜十時歸舍せり。
來るべかりしダブルユー君來らず、我獨りポツねんと机に寄る、テー、エス君の室に話聲す、時々ドツと笑ふ聲聞ゆ。
今朝は、我室に笑聲起り、今又他に之を聞く編の神たるもの何ぞ默して過ぎんや。
（廿九日夜）

俳句　白露集

●七印
禪僧の悟道の庭や鷄頭花　櫻水
花嫁の村の戸口や草紅葉　同
秀逸

漂流の身に憂き積る雁の聲　松花
有心をれざす無心や鴫子曳き　三甕
杣渡る細谷川や秋の雨　松花
雲水の叩く庵や鷄頭花　可酔
秋の旅こゝろみに曳く鴫子哉　松花
人
鷗翔る翼美はし秋の晴　三甕
地
秋晴や遊舟行くなり浪の上　可酔
天
秋晴れて棟上式の木遣かな　田柿

五月闇（三十三）　河合柳葉

爲雅の輕擧なるを頼みに、大田も頼には寄へもしなかつたが心に期した事でもあるやう、

「御前が病氣を遊ばすまで御執心の女と仰せられまする上は宜しうございます、假令お屋敷で故障が起りませうと、其罪は私の一身に被つてお取持致しませうが、其代りにはどうぞ私の願もお聞容れ下さいまする樣にお願ひ申します。」

「すりや　ノ貴樣の了見で取斗うと申すか此戀を成就させて下れるなら、貴樣の望みは何でも聞入れて遣る、望みがあるなら何なりと申せ。」

「しからば辭に甘へて申し上げます、私の願と申すは餘の義でもございません、どうぞ當時お屋敷へ上つて居りまする、清川の娘、菊野を手前の妻にお下げ下されやうなら其御禮と致しまして、御前のお望みは必然成就させまするでございます。」

「淸川の娘菊野を其方が妻に欲いと申すか」

「御意にございります。」

「よろしい予が身に引受けて必然媒酌を爲て遣はす、安心致せ。」

「失禮な事をお願ひ申上げまして誠に恐入りました、面目もございませんが何分にも御前の御威光を持ちまして……」

「よろしい、歸京次第取持つて遣はす」

「早速の御承諾お禮の申上げやうもございません、難有う存じます。致しまするさ宗匠の方のお話でございますか、妾奉公に差上げないかとも申しかねますゆゑ、切め唯何となく京都に御滯在中お側で御用を足すものがなくて御不自由だから御滯在中貸して下れぬかと云ふやうな事に致してお呼寄せになりましたら、宗匠の方でも否應なしに應ずるであらうと思ひます、然うして側にお引寄になつた上で、徐うだがと相談に及んだなら豈お可厭とは申さんであらうと考へまするが、如何思召しまする。」

爲雅は只恐悦の體で、

「其邊は何方になつても其方の宜からうやうに計らつて下れ。」

「それはそれと致しまして宗匠に話しまするは私から突然申しまするも何だか其所の所が可怪見ゑますゆゑ、これは一番宇治の若樣に頼つて、若樣の口から話して頂くやうに致しませう、若樣と宗匠とは御懇意の間柄のやうにお見受け申しますから、これが何より捷路かと存じます。」

「なる程雅致から云へば都合は宜いが、しかし彼にこんな事を聞かせるも些と面目ない話だ……」

「しかし、假令若樣に話さないと致しましても直に知れる事でございますから、それよりか斯樣々々と御前には內々の積で私から御相談申した方が何彼につけて宜からうかと存じます。」

「なるほど、それも然うだ、しかれば萬事雅致と相談して宜からうやうに取計らつて下れ。」

「心得ましてございます、早速宇治へ書面を出しまして若樣のお出でを願ふ事に致しませう。」

時しも宿の女中は、恐る〳〵次の間に手を支へ、

「宇治の若樣がお越しでございます」

▲無料紹介欄▼

人事部

●旅館か料理屋の帳場に被雇たし　姓名在社（三七）

●被雇度　年齡三十朝鮮語に至極熟練の者にて普通教育ある者　氏名在社（四一）

●求職　年齡卅歲中等敎育を受たる男子會社の事務員及商店の記帳方に雇れたし但通勤にても宿家にても宜し　姓名在社（四二）

●人を捜す　旭町一丁目に住する遠藤寛といへる人にて女暎選ご鑛山を出願せる方に至急面會したし　泥洞　玄ツル子（四〇）

●求職　体健の青年高等敎育あつて韓語に通ず相當の給料にて就職を望む但し確實なる保證人あり　姓名在社（二九）

●貿素なる家庭に疊二三枚若しくはオンドル一間借り受け家族同等の待遇にて下宿したし　姓名在社（四三）

●被雇度　旅館料理店又は商店の帳場に雇はれ度し其他余り勞力を要せぬ事何にても宜し保證人あり　姓名在社（四四）

●普通學敎師を望む　某師範學校出身當年前中或は夜間學校敎師を望む就中英語簿記に通ず　姓名在社（四五）

●年二十四歲敎育有簿記精通商店經驗有午後自四時朝九時迄執務如何を不論就務し度し可成家庭的書生等望　姓名在社（四六）

●被雇度　年廿三才にして普通敎育有商業の經驗も有會社又は通勤商店員に雇はれたし　姓名在社（五〇）

●被雇度　中等敎育あり商店又は會社等に雇はれたし　姓名在社（五一）

●被雇度　簿記學全科を修め銀行業に從事せし事十年銀行會社に雇はれたし　姓名在社（五二）

●女雇入　容姿普通十四才以上廿六歲以下女至急入用、依望、學問及琴曲を習得せしむ、給料面談　南山町三の九六琴曲敎場伊藤

年十八才より二十五才迄の店員二名至急雇入たし有望の者は本社へ照會迄（五六）

毎日曜日を除き每夜午後八時より懇篤に英語を敎授す月謝壹圓束修を要せす　日の出町百十八番　英學塾（五四）

●新聞社の校正係又は外交員を希望年三十五元刑事且つ活版事業に經驗ある者　姓名在社（五八）

年十五高等小學卒業銀行會社役所の給仕又は商店員に雇はれたし　姓名在社（五九）

長崎縣早岐生の山田太平氏に至急面會したし直ぐに住所を知らせ（六一）

物件部

貸家　路町大韓日報社前家賃八圓と九圓の疊建具付貸家四軒あり　南山町一二曾我（三五）

●借地　明治町三丁目憲兵隊附近にて二十坪餘の貸地を求む（但裏通にて可）　京城本町八丁目　吉田傳次（三八）

●從來開業中の處突然歸國の不得已に付醫療機械藥品及び患者付の儘にて至急讓渡したし　姓名在社（四七）

●馬二頭　賣たし　本町七丁目　京城一六號賣所

●古本　買入れたし　本町七丁目　秋田屋（四九）

●蓄音機　讓たし但附屬品付二個あり　社內　坂

電話　至急買たし　社內島村（五七）

●貸地　六十坪　古市町韓國畜產株式會社近傍約　古市町九番戶　小縣（五五）

●旭町一丁目通湯突十五間地所附（但七十坪）安價に讓りたし　姓名在社（六十）

●貸家　六疊二間四疊一間永樂一高畑にて井水潔　氏名在社（六二）

●貸間　本欄人事部に御答申すオンドル一間疊貳枚敷餘り庭園尤雅にして閑靜詳細以御來談を乞　永樂町佛教會堂山田（六三）

古着道具買たし　本町七丁目一六號賣（六四）

東城新聞

韓國委員の拾臺辞

東電の報ずる所に依れば東拓韓國委員等放言して曰く「日本に在る日本人と在韓日本人とは其性質を異にせり日本にある人は親切なるも在韓日本人は猛虎の如く韓人の財產を横奪するものあり拓殖會社創立の上は善良の人を入國せしめられたし」云々、之れ素より渠等が特有の外交的弄舌に過ぎざるも實情に通せざる一部の人は或は眞面目に之を聽取するものもあらん、余輩は斯る滑稽極まる弄舌の爲に假令本邦一部の人にせよ在留邦人の眞相を誤解せしむるを遺憾となし、聊か茲に辨じて渠等の謬語を叱し併せて其眞相を闡明せんとす。

渠等は滯在半ケ月にして日本にある日本人を善良とし在韓日本人を猛虎の如しと斷定するに至つては其心事の輕浮なるを見透さるゝなり、之れ眞摯にして常識あるものゝ放言し能はざる所なり、然るに渠等は輕忽にも其獨斷說を放言して憚らず、之れ韓人特種の外交的弄舌なり、恐らく韓人に非ざれば斯る輕佻浮誇の言を弄する能はざるべし、現内部大臣宋秉畯も昨秋伊藤公に從つて東上するや、等しく同一の放言をなして盛に在韓日本人を嘲罵したりき、責任ある内閣の一員にして然り、何が故に渠等は在韓日本人を仇敵の如く罵詈する乎、渠等は之を以て外交術と心得幾分日本的勢力を排除せんとするの手段となすに過ぎず、而して其動機は何れより來りし乎、惟ふに伊藤公が在韓日本人に重きを置かず殊に不良の徒多きかの如き考ありと渠等は早くも推測したるが爲なり、換言すれば伊藤公の目に映じたる在韓日本人は猛虎の如しと機微の間に推測したるなり、故に在韓日本人を罵倒するは伊藤公の政策に謳歌せるものなりと解せる沒分曉漢もあるなり、伊藤公の寵を擅にせる宋秉畯さへ憚なく在韓日本人を罵倒せしに非らずや、抑も渠等をして斯る輕佻なる暴語を發せしむるに至れる由因に遡れば伊藤公の對在韓邦人の方針を誤れるも其一因なり。

夫れ渠等は何を以て在韓邦人を猛虎の如しとなす乎、在韓邦人中には韓人の爲に慘殺せられて何等の賠償を得ざるものも少からず、最初在韓邦人の數僅少なりし頃は常に韓人の襲擊を受け安眠だもなす能はざりき弱きに乘ずる韓人の殘忍酷薄は殆ど猛虎の如きものありしなり在韓邦人中には韓人に對する怨恨こそあれ渠等より猛虎の如しと罵倒せらるゝ理由なし、在韓邦人が今日迄に發展する間には慘殺襲擊等幾多悲酸なる境遇を經過し來れるなり、夫を殺され親を殺され、妻子を傷けられたるもの其數決して尠少ならず、今日列國が優越權を認むる迄に發展したるは、以上の如き最も悲酸なる犧牲を供したるの結果なり、然るも尙は忍耐して先驅者を以て自任し、韓國人に對して何等の怨聲をも發せざるのみならず、自營の傍ら韓人に對し幾分指導をなし來れり、韓國の文物にして在韓邦人の爲に發達したるもの決して尠からず、其心事や猛虎に非ずして羊の如く柔和なり、由來韓人の性癖として恩を感ぜざるは何人も知る處なるが之を顚倒して怨恨を以てするが如きは韓人に非ざれば能はざる所なり、假令外交的政略にせよ斯る暴語を放て在韓日本人に對するは決して余輩の看過する能ざる所也

東京電報

▲東拓會社と定款

東洋拓殖會社定款に對する韓國政府の認可は昨日日本政府に着したるが我が政府にては未だ認可の運びに至らず何れ七八日頃認可の上發表せらるべし(六日發)

▲馬券廢止令

馬券廢止令公布せらる其理由は新刑法と其精神と相容れず風紀の紊絕ふべからず經驗上廢止すと云ふにあり(五日發)

雜報

●皇帝の德壽宮行幸

韓皇帝には本日太皇帝親謁の爲め午前十一時昌德宮敦化門出御罷朝橋、蛾橋、鐘路、黃土峴、新橋等を經て布德門前を御通過大漢門より德壽宮に入らせられ親謁の後午後五時還御あらせらると云ふ

●義親王の參内 義親王昨日昌德宮に參内皇帝皇后に謁見あらせられたり

●統監の消息

統監は五日古谷秘書官小山技師を隨へ興津に赴かれ同地三泊の上歸路大磯に立寄られ來る十日若くは十一日大森邸に入らるゝ旨電報其筋に達せり

●阪谷男爵一行

前藏相阪谷男と其一行は來る八日海路大連を發し九日安東縣に着し十日同地滯在十一日同地を發し平壤に着し十二日同地滯在十三日同地を發し京城着の豫定なる由なり因に阪谷男入京の上は經濟協會を始め各方面の歡迎盛なるべしと云ふ

●鶴原氏愈辭職

統監府總務長官鶴原定吉氏は伊藤統監と共に歸朝の際既に辭職することに決したりとか又たは辭職を思ひ止りしとか兎角決定せざりしが愈よ前月末其辭表を提出したりとのことなり

●大臣參與官會議

六日午前九時より統監府樓上にて各參與官會議の例會あり午後一時より統監邸にて各大臣參集會議あり午後四時散會せり

●稷山金鑛の不始末

昨紙報導したる通り稷山金鑛の鑛業用機械及諸建築物は去る三日米國總領事の手を以て差押を執行せられたるが今其理由として傳へらるゝところを聞くに元來同金鑛は韓國鑛山中最も有望なるものにして米人デシユラ氏が淺野澁澤兩氏と共同して經營せるにも拘らず今日までに歩々成績を收むる能はずソレコレの事情により出資者何れも皆尻込みして思ふ樣に出金せざるより自然流通資本を欠くに至り其結果同鑛の使用人なる米人ミルス外二名及び邦人竹鶴某に對する給料の滯り壹萬三千圓餘となりたるが是等使用人は過去十ケ月間許りは默して只デシラ氏其他の爲す所を見んと待ち居りしも今日に至て尚デシラ氏と澁澤淺野兩氏の間に蟠れる鑛業施設及計算の件等解決する模樣なく爲に使用人等は何方よりも給料支拂を受くる能はざるを以て今回止むなく右四名の人々等はデシラ組合並にコレアンエキスプロレーション會社を相手取りて米國總領事に訴へたるを以て同領事に於て直ちに差押の手續に及びし次第なりと云ふ因に京仁に於ける各商店が稷山金鑛に賣込みたる品物代金は悉皆不支拂となり韓人夫の給料も殆んど過去六ケ月分許りは不仕拂となり居れりと云ふ

●李完用の魂膽

東洋拓殖會社の韓人理事として何人が其撰に當るべきやは未だ明ならざるが聞くところによれば總理大臣李完用は自家の親戚李鎬成を擧げて理事となさんと目下大に盡力中なりと云ふ而して李が何の爲に自家の手より理事を出さんことを欲するかと云ふに其魂膽は外ならず結局彼は自家の所有なる扶安、金堤其他に於ける荒蕪地同樣の田地を拓殖會社に押付け利得を悉にせんか爲なりと云ふ尤も拓殖會社に就ては內相宋秉畯も李完用に劣らざる荒蕪地押付策を目下講究中なりと云へば拓殖なるものゝ前途は中々に面倒なるべきなり

●軍司令部移轉完了

軍司令部は六日を以て其用具の運搬を完了し愈々全部の移轉をなせり

●衞戍病院移轉

京城にある陸軍衞戍病院は龍山に移轉すべしとのことは曾て記せし如くなるが愈よ本日全部の移轉をなし軍人軍屬の診察治療は龍山にて取扱ふと

●軍隊輸送第一期完結

第六師團第十三聯隊第二大隊は五日午後〇時三十分龍山に着す又第六十四聯隊第三大隊は四日元山に同二大隊は五日成興に何れも上陸し之にて第一期輸送は完結せり

●要塞實彈射擊

鎭海灣要塞砲兵隊に於ては目下實彈射擊を實施中なるにより軍司令部參謀中島大尉は之が見學として同地に赴かれたるが七日歸任さるべしと

●拓殖會社定款の認可

東洋拓殖株式會社は一昨日別項記載の定款認可を農商工部大臣に申請したるが大臣は本日の統監邸に於ける大臣會議に於て其の同意を求め統監府の承認を經たる上昨日附を以て認可する筈なりと

●拓殖會社株募集

東洋拓殖株式會社創立委員長は一昨日同會社定款認可の申請と共に株式募集案の認可を求めたるが其の要領は左の如し

一、株式五十萬株の內韓國政府の引受株六万株殘り十四萬株の內一千株を控除し十三萬九千株を公衆より募集す
一、申込期限は十一月一日より十日迄とす
一、申込證據金は一個五十錢とし第一回拂込に充用す
一、第一回拂込金は十二圓五十錢とす
一、申込株數需要額に超過する時は總申込人に對し按分比例にて募入額を定む
一、取扱は韓國に於ては各銀行支店出張所とす

●京城議員選擧彙報

▲同盟會の最優勢 彈投票期日も明日となれば各候補者の人氣如何にと偵察隊を各方面に派して調査するところありしに其發する所の報によれば期成同盟會の豫撰候補者は同情の點に於て將人氣の點に於て最優勢を占めまづ今迄のところにては全部の當撰疑なきが如し

▲西部の模樣 熱心なる同情者が同盟會候補者十名の全部を大多數を以て當撰せしめんと意氣込日夜盡力しつゝある有樣は頗る目覺ましき次第なるが彼の不平連の運動者は素より腹に何の考もなく反旗に附隨したるに過ぎざれば大勢同盟會候補者に歸したりと見るや昨の反對者は今の贊成者となりて反對側より同盟會候補者の爲に盡力する者續々と生じたりとの事なり

▲公民會の不都合 公民會とやら云ふ不平連亦々小旗を飜して戰場に驅出たるが同會が增田、田中、前田の三氏を同會候補者中に加へたるは一種の策にして增田、田中、前田の三氏は同會の候補者たることを承諾したることなく亦一回の交涉をも受けたるに非ずと云ふ

▲今回の撰擧に就き面白き現象は期成同盟會の反對とも見るべき各小會合者が自會の候補者を世に發表するに當り必ず多數の同盟會豫選候補者の名を借り連ね其間に小野心家二三の名前を挾みて錫を鋼に通用せしめんとの軍略をとりたることなり、小會合者反對なれば何ぞ同盟會に關係なき全然別々なる候補者を自會の爲に推さゞる笑ふべきは錫を鋼の軍略なり

▲豫選新候補者 各小會合者や不平連とて舊議員の十四名には齒も立たざるは知り居れども豫撰新候補者の六名は比較的地盤も堅からざるべしとて競爭の鋒先を之れ六名の新候補者に向け居る次第なるが菊池議讓、城六太、前田熊市、田村義一郎、田中始一郎、石井新の六氏とも何れも强固なる個人的地盤と同盟會の團体的應援あるを以て何れも當選は疑なかるべし

▲東部の模樣 東部の元老中村、關、釘本、梶原等の諸氏は過日來大に若返られ目下不在中なる山口氏其他の分まで大に士氣を鼓舞せられたれば有志家同情者の同盟會候補者に對する氣受一層良好となり彼の落町連公民連が如何なる狡策を以て切込まんとするも到底齒は立たざるべし而して東部有志者の云ふ所に因れば我等の眼中には小反對者や不平連は映ぜず唯期する所は同盟會の候補者全部を當撰せしめ西部に向つて遜色なからしむるにありと云々

●熊谷民長の訓諭

民會議員選擧の競爭は益々激しくなりつゝあるを以て熊谷民長は部下一同に對し此際競爭裡に投じ運動に干與するが如きことなき樣注意する所ありたり

●撰擧立會人 明八日執行さるべき民團議員撰擧立會人は左の如く撰任せられたり

大島專藏 鮎貝房之進 阿川重郎 佐々正之

●憲兵補助員通譯給規則

昨日憲兵補助員に關する規則左の通り定めらる

憲兵補助員通譯給支給規程

一、憲兵補助員の日本語を解する者には其技能の程度に應じ左の區分に從ひ通譯給を加給す

一等月額金三圓 二等月額金二圓 三等月額金一圓

二、前項の分課は分隊長の申請に因て隊長に於て之を許可す

憲兵補助員恤金規則

第一條 憲兵補助員在職中其職務に因り左の事項の一に該る者には本規則に因り病傷手當金賑恤金を給す

一、傷痍を受け又は疾病に罹り服務に堪へず解職したるとき
二、死亡したるとき

第二條 病傷手當金は左の區別に從ひ之を本人に給す

一、前條第一に該る者にして癈篤疾となりたる者には五十圓以上百圓以內
二、前條第一に該る者にして癈篤疾に至らざる者には三十圓以上五十圓以內

第三條 賑恤金は左の區別に從ひ第一條第二に掲ぐる者の遺族の一人に之を給す但し賜與順位は本條記載順に依る

一、妻、子、孫には五十圓以上百圓以內
二、妻子、孫なきときは父母(養父母同じ)但父母若し其生存せざるときは二十歲未滿の兄弟姉妹に對し三十圓以上五十圓以內

憲兵補助員勤功賞金規程

第一條 憲兵補助員にして勤功章附與規程に依り勤功章を授けらるゝ者には賞金を附與す

一、甲種勤功章を受くる者(各每回金五十錢)
二、乙種勤功章を受くる者

第二條 勤功賞金は勤功章を授與すると同時に之を附與す

附 則

本規程發令前の勤功章授與者にして現に帶有するものには本令に依り溯り之を支給す

●信夫委員長の懇談

信夫赤十字社支部委員長は一昨夜仁川商人及紳官僧侶等常に多數の人に接する者十數名を仁川俱樂部に招き赤十字社業擴張の爲め社員の勸誘募集につき特に盡力されたき旨懇談したりと

●第十三師團送別會

京城民團の主催にかゝる第十三師團の送別會は和將臺公園に於て來る十八日頃盛大なる宴を催さるべしと云ふ

●第二回各國居留地會

過日仁川各國居留地先埋築問題の案件につき活氣を呈せる各國居留地會は其後調查委員の手許にて種々審査中にて其調査報告は既に英領事に於て草案を了せられありしが愈々本日午後より第二回會議を開き再び該問題につき附議する筈なりと

●鐵道交換地委員會

本日午後一時より仁川鐵道交換地整理委員會を開く筈なるが同地區は數等に分ち入札の方法を以て一般希望に貸附する筈なりと云ふ

●第一銀行貨幣發行週報(自九月廿七日至十月三日)

銀行券總發行平均高	九、〇九一、四〇〇圓
內正貨準備發行高	三、一九五、七〇〇圓
保證準備發行高	五、八九五、七〇〇圓
銀行券平均手許有高	八五六、四〇五圓
銀行券市場平均流通高	八、二三四、九九五圓

●新大豆の廻送

新大豆の上廻弗々現はれたるを以て仁川穀物商は盛に大豆を輸出するもの多く一昨日仁川出帆の安東丸にて二千叺を大坂に信濃川丸にて五百叺を鹿兒島に輸出したり

●牛皮相場の下落 一時二十四圓代より二十七圓五十錢に持直りし牛皮は其後大阪安電の爲めに昨日來より又々五十錢方の下落を現はし廿七圓內外にて手合出來居れり

●英國司令官の入京

香港英國駐屯隊司令官少將ハロード氏及副官工兵少佐アシスチン氏大尉ヒースコート氏は滿州の視察を了し五日來京六日午前統監府に曾禰副統監村田少將鍋島外務部長を訪問し尙長谷川大將を訪問せり一行はアストルハウスに投宿せしが一兩日の內には退京日本に向け出發せらるゝ豫定なり

●牟田少將の歸任

參謀總長の命に依り上京中なりし軍司令部參謀長牟田少將は本日歸任の豫定なり

●明石少將の龍山巡視

明石憲兵隊長は昨日朝數騎を從へ龍山を巡視せり

●村田少將の旅行談

愛國婦人會救護部員は五日鶴原氏官邸に例會を開き今回北韓地方を視察せられたる村田少將の出席を乞ひ其旅行談を聞けり

●米總領事日本行

京城米國總領事サモンス氏同夫人來る十四日より一二週間の豫定にて日本に赴かる筈

●李軍相の發期

攝河泉地方に擧行せらるゝ秋季特別大演習陪觀の爲め且つは韓皇太子御誕辰奉祝を兼ね來る十四日日本に向け出發する軍部大臣李秉武軍務局長參將趙性根大尉官工兵參領[illegible]侍從武官[illegible]兵正尉李秉規東宮付武官副兵正尉[illegible]隨行なりと云ふ

●大河內書記官の招待會 大藏省に關係ありし在城の有志者は過日來天眞樓に滯在中の大河內大藏書記官を花月に招待したるが氏は昨夜十時四十分南大門發列車にて歸東せり

●仁川同志會役員會 七日午後より仁川商業會議所に於て同志會役員會を開く筈也

近事片々

▲京城●日報は確に御用紙也殊に拓殖會社と移民と題する社說は其特色を充分發揮す
▲拓殖●會社の移民選擇法なるものは何人と雖も其偏狹なるを笑ふ御用紙は之を贊す
▲刑餘●若しくは素行修らざる者又は一時的出稼を排斥すべしとを以て尤もなりと云ふ
▲帝國●にして大陸經營の抱負あるに於ては實際斯の如き撰擇法の行はるべき者也や
▲宗教●家を選拔するが如き法に依て大陸移民を選拔せんとす是迂愚に非ずして何ぞ
▲清濁●併呑の雅量なくして大陸經營をなさんとす木に依て魚を求むるよりも難き也
▲見易●き道理は各國殖民地を見るに若かじ如何なる移民に依て成功せられ居るやを
▲品行●方正資產ある者のみを採擇するに至ては果して應ずるものありや隨分非常識
▲日報●子の希望は着實にして經驗あり永住の志粗衣粗食するも躬行實踐するもの也
▲斯る●贅澤なる移民論は決して事實に就て行はるべき者に非ず殆ど架空の論議なり
▲斯る●者耳を以て大陸移民を採擇せんとするは全く徒勞に屬す也覺醒せよや日報子
▲併て●之が所謂御用論なりと云はゞ亦何をか云はんすまじきものは宮仕へとは眞也
▲選擧●期日の切迫と共に競爭激烈ならんとす競爭はよし只飽までも公明正大なれや
▲革新●何會とかの行動は合點が參らぬ殊に京城日報社員某等が參劃する更に不合點
▲京城●日報は御用紙なり民長官撰派なり此御用社に勤むる人の參劃は極て不思議也
▲革新●某會と雖も豈夫民長官選派でもあるまい居留民として斯る謂はれの有害なし
▲其謂●はれなき某に京城日報社員の出入奔走も些と合點ならぬ旗幟の不鮮明怪也
▲民長●官撰令撤廢期成同盟會は旗幟鮮明居留民は迷はず之に贊同せよ是民權擁護也
▲徒に●迷ひて漁夫の利を得せしむる勿れ御互に權利の消長に關する事也愼重なれや
▲宮內●府にて鹿狩を擧行せんとす今や鹿狩りの好時期此頃既に一頭の獲物有と聞く
▲鶴原●君辭表を出したりとの說有辭するの辭さぬのと評判區々去れど今回は事實か
▲滿鐵●總裁たらんと頻に運動し居るよし併し鶴原君には滿鐵總裁の役は些と重過る
▲馬券●問題も何だか曖昧になりかけた力味返つた岡部法相も矢張伴食を發揮せるか
▲米國●オクラハマ州知事ハスケル氏は大[illegible]して告訴す選擧の餘波

短篇小説　舊友(七)
青楓作

南面せる書齋に、一人餘念もなく、机に凭れて思案するのは、村田である。

「一体舊歴したと云ふんだらう、併しそう進のとれるところから察すると、甘く行かんのかな」

折々斯ふ呟いては、自暴自棄にプカ〳〵とスカーを喫ふのである。

不圖門外に人力車の音がしたかと思ふ間に、トン〳〵と階子段を上つて來る音がする、

「只今戻りました」

と、火鉢に進み寄るのは、待ちにまつたる妻の雪子であつた。

「ア、今歸つたのか、大分手間がとれたね」

村田も机を離れて、火鉢の前に雪子と向ひ合つた。

「結果は如何であつた」

「上々の首尾で御座いますよ」

「そうか、私は又、其許が餘り遲いから、成功が覺束ないのか知らんとな、實は心配して居つたのじや」

「左樣で御座いますか、本統に貴夫物は案ずるより產むが易いとかの例言の通り、容易く纏つたのですよ」

「それは、至極結構〳〵、御苦勞であつた」

「アノ細田樣は、何處へ」

「ウム、細田か、倭城臺の音樂だらう、併しもう直き歸るよ」

「左樣ですか、一寸御免下さい」

雪子が、立つて次の間に入ると、入れ違つて髯蓬々の細田が書齋に通るのであつた。

「音樂は如何であつた」

「到底れ話にならん、〳〵、あれじや大道樂隊の少し毛の生へた位だ、第一規律の亂れて居るのには一驚するよ、指揮官が奏樂中に烟草をくわへて、指揮する狀態なんぞは、名譽ある日本帝國の軍樂隊で御座るとは言はれまいよ」

「君は、相變らず中々の元氣じやな、アハヽヽヽ」

村田は、心地よげに笑ふのである、

「官紀弛廢の今日だから、其のバチルスが軍隊にまで侵入するも無理のないことだ、併し我が在留の同胞が稍々平ぎして、ヨボ化せんとするが如きも、慨すべきことであらう」

細田は、何處迄も眞面目に說きたてるのであつた。

●九月の氣候

去月中觀測所に於て實測したる結果と昨年及平年九月に於ける氣候とを對照すれば左の如し

項目	四十一年	四十年	平年
平均氣溫(華氏)	六六、二	六九、六	七〇、〇
平均最高氣溫(同)	七五、九	七八、一	七七、七
平均最低氣溫(同)	六〇、四	六三、二	六三、三
高極氣溫(同)	八四、九	八四、九	九一、〇
同上起日	五日	十一日	二四年四日
低極氣溫(華氏)	四四、三	五一、四	四九、二
同上起日	二十五日	三十日	三五年二六日
晴天日數	二六	二二	二五
曇天日數	四	八	五
雨天日數	七	四	八
雨雪量(粍)	四六	三〇	一二九

即ち本年九月の氣候は概して昨年及平年に比し稍低度なり而して晴天日數は昨年及平年に比し多く雨天日數は昨年より約五割增にして平年と略ぼ等しく雨量も亦昨年に比すれば約五割の多量なりしも平年に比すれば半額にも及ばざりし

●俳句大會

多田千春、奥田翠香、淺野曉村、兒玉秋川、西山花葉、堀川中納言諸氏の發起にて來る十一日(日曜)午後一時より南山町待合此花に於て俳句大會を開催する筈なり同好の士は奮つて來會せられたしとなり因みに會費は要せざるも來會者は葉書十枚を持參せらるべしと

●水原行幸紀念繪葉書

去る二日韓皇帝水原行幸紀念する爲め水原新報社より發行したる繪葉書は韓皇、華山の御陵、隨柳亭、華虹門、華寧殿、西湖の瀧と抗眉亭、勸業模範場等撮影したるコロタイプにて好紀念とすべきものなり

●井戸に投じて自殺す

西部盤松坊池下契五十七統七戶李建龍(二七)は四年以前より不治の病に罹り恢復の到底見込なきを苦にし常々より我が身の因果をかこちつゝありしが近頃に至りては厭世の念徐ろに生じ時々は家人朋儕に向つて詰らなきことを口走ることもありしが案の條昨日午前四時頃附近の太平洞の共同井戸に投身し自殺を遂げたり發見者は同人の弟金建明潭龍の二人にて死骸は檢視の上家人に引き渡したり

●喧嘩と亡狀

南部草洞布木商淸國人王明研は豫て同部五壯洞百五十統金應九なるものに布を賣却せしが今に至るも代金を支拂ひ呉れざるにぞ王は六日午前七時半頃金の自宅に赴き右の代金を請求せしに金は言を左右に托して一向支拂ひ呉るゝ模樣なきより王は非常に立腹し爰に端なくも一場の喧嘩を始めしも結局巡査出張し相當の捌きを付けたり▲昨日午前八時頃北署草洞金姓女(五十)なるもの銅峴分署へ出頭し訴へ出づるやう自分は四五日以前より南署武橋李啓錫なるものゝ家に家事手傳に赴き居りしに昨日主人の不在中一人の淸國人來り自分に向ていふやう自分は此の家の主人に貸金あるが何度催促に來ても支拂ひ呉れず實に困却せるが併し今日といふ今日は主人の在無に關はらず品物にて貰ひ行くべければ前以て承知ありたしといふや否や亂暴にも房內に侵入し金目の品物を持ち行けるが其の中自分の品物も含みあれば何とかして取り戾して貰ひたしと淚ながらに申し立てたれば警官も氣の毒に思ひ早速犯人の搜索に着手したるが支那人の名は杜垂芝とかいふ由

●女房酌婦と化ける

島根縣美濃郡都茂村槍谷信太郎(三二)の妻シゲは去月初旬頭國許に於て二三日間實家に歸り居り暇て用事も濟みたれば夫の許に立ち戾らんとて或る日實家を出でたるに折柄途中にて友達の中田キヨ(三五)なるものに久々で邂逅し種々世間話しをなした末下等社會の身に分別なきシゲは其の際キヨに向ひ互に這んな片田舍に一生を燻つて暮すも詰らなき故此れから二人で朝鮮へ出稼ぎし思ふ存分デレ助達の金を絞つて千なり二千なりの貯金を拵へ他日故鄕に錦を飾らうではないかと說き勸めたりしにキヨは一も二もなくシゲの言葉に乘つて了ひソレナラ善は急げの譬への通り此れから出發しやうと二人の相談は爰に早速纏まりシゲは家へは歸らず其の塲より出奔し當座の見收めと途中諸所方々を見物し二十五日馬關に到着せしに其の際圖らずもシゲは朝鮮より酌婦雇入れの爲め或る料理屋の主人が同地に滯在し居るとのことを耳にしたれば之れこそ好い機と早速其の主人に遭ひてコン〳〵と賴み入りたるに主人も元より其の希望なれば契約は立ろに纏り三人同道して愈々京城に乘り込みしは本月初旬頃なりきサテ二人の女が住み込みし料理店といふは實は至つて小さき飮食店にて太平町一の六四二藥亭なるが兎も角シゲは望み通り朝鮮三界迄流れ來て立派な淫賣婦と成り濟ましたことなれば娼賣大事に切々と前尻の切り賣りを爲し居りしが話し變はつてシゲの國許にては同人が突然行衛不明となりしを痛く心配し諸所心當りの家を尋ね廻りしも一向に要領を得ざるにぞ或は朝鮮に渡りはせずやとあらましの目星を附け都茂村警察分署の手を經て當地南部署へ搜索願を依賴し只管搜索の一日も早からんを祈り居りしに案の如くシゲは前記の二藥亭に住み込み居りしことの通知に接したればシゲの夫信太郎は急ぎ國許を出發し再昨日當地に到着昨日南部署に出頭せしが果して無事に引き取つたか何うかは未だ不判明なりし

●家出花嫁の搜索願

北部齊洞崔相極なるものゝ花嫁が夫の無情を恨み窃かに實家に逃げ歸り居る內母親よりの叱責に遭ひ終に何れへか家出せしことは昨紙の三面に報道せし如くなるが此の娘の家出に母親は吃驚し直くさま娘の婿崔に知らせ同道して昨日銅峴分署に搜索願を申し出でたるが其の際母親はもし娘が發見されたる曉は何うか警官の御威光で婿の家に歸るやうごうン〳〵賴み入りたるも婿は何うあつても家には入れず萬一家に立ち歸つた際は何分警察の權力で嫁をツマミ出して貰ひたしと銘々勝手な贅言を並べ居るにぞ警察官も持て餘し居るとか

●掛金取りの門違ひ

中部寺洞十六統四戶洪景瑞(四十)の弟某は去る七月頃廣州西門外に居住する李君瑞なるものより生牛を七十四圓にて購求し其の際半額丈を支拂ひ置きたるも後の半額は今に至るも支拂はず依つて李は催促旁々京城に來り去る三日午後二時頃前記洪方に赴き殘額を請求せしに洪は自分の知つたことでなく弟が勝手に買つたものなれば弟に催促せよと言ひしも李は承知せず弟でも兄でも同じ事だと暴言を吐き隙て洪に喰つて掛りしかば爰に定りの喧嘩となりしが李は[illegible]警察署に引致されたり

●宮相官邸のボヤ

三日午前十一時頃靑坡なる宮相閔丙奭の裏手のオンドルより出火せしかば家人及近所のもの寄つて集かつて消し止めたるが原因は近頃オンドルを修繕せしかば是を乾燥せん爲め火を焚き居りしに圖らずも附近に積みありし藁に燃え移りしより起りたるものなりと

●次もボヤ一件

西部盤松坊雇馬洞九十統李昌宰方にて四日午前三時三十分頃ボヤありしが原因は前同樣オンドルを修繕後火を焚きつゝある際附近の藁に燃え移りたるより起りたるものなり▲昨日午前十一時頃西部仁達坊長興庫百十一統表碩鐘方に出火ありしが直ぐ樣消し止めたり原因は椽側の石油罐にオンドルの火が移りたるより起れりといふ

●醉ツタクレヨボの亂暴

中部中學橋四十七統四戶金景三(四十)といふは去る三日午後八時頃飮んだ酒から飮まれ泥峴居住の鄭錫崇(三十)を毆打し亂暴を働き居るを巡廻中の巡査に認められ引致の上散々叱り飛ばされたり

●小兒に惡戯で派出所行

南部薛洞居金熊而(十七)は一昨日午後七時半頃會洞附近にて遊び居りし小兒に惡戲をなし困せ居るを通り掛りたる會洞金成祿(三八)が認め會洞派出所に突き出したり

●飮食店のお灸

大平町一丁目六十四番地飮食店高田ミカ(三七)は平常より橫着ものとの評判高かりしが此奴不都合千萬にも去

月廿九日山口縣平民中田キヨ(二十)及び島根縣平民片木シゲ(十八)の兩人を雇入れながら其筋への屆出を怠りて二圓の科料を申渡さる

●腸窒扶斯

鐵道管理局合宿所吉崎善吉は腸窒扶斯に罹り四日漢城病院に收容さる

●牛の頓死

一昨日午後五時頃龍山元町居住廉鳳南(二十)が牛車を御しつゝ家路に歸らんと明治町より南大門通四丁目に至る電車踏み切附近に差掛るや牛は如何にせしか其處に倒れて起き上らず其儘遂に死亡したり原因は詳かならざれど多分腦卒中を發したるものならんと云ふ

新講談

女俠秋瑾の傳(七)

『夫妻の間意見融合する能はず、實に天下の恨事なり。』

「新んなのを女房に持つては災難だ。」と思ふ讀者もありませうが、其所が又た秋瑾の偉い處ろ。今更ら逐ひ出されました。」で、泣いて親許へ歸るやうなことを決して仕ない。爰に意を決して日本遊學にと志した。

當節の學問は金である、殊に萬里笈を負うて日本に遊學しやうと志した秋瑾、先立つものは金と云ふので、種々才覺したが宜い智慧も浮かばぬ、ちやと云つて親許に金の無心も氣が利かないし、事情を云つて他に借るのも面白くないと云ふ處から、爰に女には生命から二代目の、本服調度簪珥を賣り飛ばすことに決心した。

日本に渡れば西も東も知らぬ他鄕、頼みにするは萬能力の金ばかり、一文でも多く持つて行きたいと云ふのが人情であるのに、秋瑾は此の血の出るやうな金を以て、同じく血に泣ける志士を助けた、

それは壽河の志士某が、戊戌の政變即ち彼の康有爲の事に株連して、刑部の獄に繋がれて居ると云ふことを聞いた秋瑾、その奇禍を哀れんで、調達中の學資を割き、匿名で獄中に差入れた一事である。

其の後志士某は身に纏る疑ひも晴れて、やうやく獄を出づることが出來たと共に、彼の多大の同情を寄與して呉れた篤志者の誰なるやを調べた處ろが、意外これは秋瑾と云ふ一女史であると分つて愈よ驚き、早速逢つて禮を云はうと思つたが、既にその時は秋瑾東遊の后であつたので、止むを得ず鄭重なる禮手紙を在東京の秋瑾に寄せて、厚くこれを陳謝したが、それからと云ふものは此の志士某は人と語る毎に、涕を零して秋瑾の義俠を稱揚したと云ふことでござります。

留東京留學中の秋瑾は、年は若し、標緻は宜し、支那學生中の異彩と稱へられた上に螢雪の功を積みて學問には根底が出來、剰けに品行は方正であつたので、頗る閨秀の間に名が高かつたが、爰に秋瑾をして日本を去るを餘儀なくせしめた一事が起つた、

それは一昨年冬の留學生取締規則である、當時一萬餘の支那留學生は、市内到る所に散在して、怪し氣なる學校に通ひ、一朝卒業歸國の曉は、日本の大學でも卒業して來たやうな顔をすると云ふ通弊があつたので日本政府は留學生相手の學校に制限を加へ雨後の筍のやうに殖えた無資格の學堂を解散せしめたので、二三年の學歴を滅茶にして、多くの學資は結局漢學者流、喰詰め者先生の腹を肥したに終つたと云ふ不幸を直接に見たのであるから、女俠秋瑾何條默止して居らう、大に不平をならし斷然袖を拂つて支那に歸つた。

●新聞料 ▲一枚金二錢▲一ヶ月前金卅五錢▲三ヶ月前金壹圓▲六ヶ月前金貳圓▲壹ヶ年一ヶ月金 拾錢
●廣告料 ▲五號活字十九字詰一行一回四十錢 廣告五號活字十九字詰一行金七十錢
發行兼編輯人 秋山忠三郎
印刷人 高木久馬太
發行所 京城新報社 京城西署西小門通 電話一二三番